

『わたし、泣いちゃダメ』

近藤茶

【元にした作品】

無し

【あらすじ】

クリスマススイブ。雪で止まってしまった電車の中。乗客達は早く帰りたくてイライラしているが、楓は焦る理由が何もない。これまで過ごしたクリスマススイブを思い出しながら、楓は今の寂しさと向き合っていく。

【特記事項】

街の中に埋もれている普通の孤独を抱えた主人公が、人との小さな交流を経て、少しだけ前を向く瞬間を描いた、短編脚本。

【本編文字数】

5178文字

○電車内・19時ごろ

12月24日。クリスマススイブ。雪で止まってしまっている電車の中。まばらに人が座っている。皆、何か予定があるのか、焦りや、イライラとしたような空気が電車内充滿している。

アナウンス「お客様にお知らせいたします。現在線路上、積雪の影響で、全線で徐行運転を行っております。お急ぎのところ大変申し訳ありませんが、運転再開まで今しばらくおまちください」

アナウンスを聞き、乗客たちの落胆や、苛立ちがさらに色濃くなる。その中に一人、楓は居心地悪そうに座って、周囲の様子を窺っている。

楓 N「クリスマススイブ。私には早く帰りたい理由が、何もなかった」

スマホの着信音。乗客たちの視線が一斉にそちらに向く。スマホの主は慌てたように音を止めようとするが相手の名前を見て、周囲に申し訳なさそうにしながら人の少ない出入り口付近に移動し、電話に出る。

若い男（小声で）「もしもし？ ごめん電車止まっちゃってて。いつ動くかわかんなくて。どっか入って待ってて。ごめん。必ず行くから。本当ごめん……」

周囲を気にしながらもコソコソと話す若い男を、楓は微笑ましく見ながら、少し遠い目をする。鈴の音。突然、楓の目の前に、かつての恋人がいる。

恋人「楓！」

楓「えっ？」

恋人「ごめん、お待たせ」

○駅前・数年前のクリスマススイブ

今より少し若い楓とかつての恋人が、クリスマスのイルミネーションに彩られた駅前で待ち合わせをしている。

楓「遅いよ」

恋人「だからごめん。電車止まっちゃったんだよ、しょうがないじゃん。予約の時間には間に合ったし。（楓を見て）てか、その恰好……」

楓「何？」

恋人「良いところ予約したからちゃんとした格好で来てって言ったじゃん」

楓「ええ？ ちゃんとしたつもりだったんだけど」

恋人「まあいいや。行こう」

○レストラン

二人、上品なレストランにやってきている。店員に案内され席につく。慣れていないのか、楓はソワソワしている。恋人は平然を装ってはいるが、やはり慣れていなようで、どこかぎこちない。

店員「今日は特別な日に当店をお選びいただき、ありがとうございます。こちら、本日のメニューになります」

二人、真剣な表情で眺める。

店員「メインはお魚とお肉からお選びいただけます」

楓「えっと……」

恋人「じゃあ、両方肉で、お願いします」

店員「かしこまりました。お肉料理は黄金軍鶏のドウミドワイユ仕立てになります。失礼いたします」

店員、一礼して去る。

楓「（小声で）……ドウミドワイユ仕立てって何？」

恋人「わかんない」

楓「わかんないもの食べるんだ、これから」

恋人「いいじゃん、面白くて」

楓「でも（周囲を見回し）緊張するね」

恋人「あんまキョロキョロするなよ。恥ずかしいから」

楓「私たち、浮いてない？」

恋人「だからもうちょっと良い恰好で来いって言ったじゃん」

楓「ここまでちゃんとしたとこ来るなんて思ってたから……」

店員「失礼いたします」

店員、二人の前にそれぞれ皿を置く。皿の上にはどう食べればいいのかわからな
いような変わった形状の食べ物に乗っている。

店員「こちら、前菜になります。失礼いたします」

店員、一礼して去る。二人、届いた料理にどう手を付けていいかわからず見つめ
ている。

恋人「……食べよっか」

楓「うん」

恋人は悪戦苦闘しながら料理を食べようとしている。楓はその様子を見ている。

楓「（呟くように）なんかね……そんなに頑張ってくれなくて良かったよ。いつも無理
して、頑張ってくれるの、嬉しかったけど。普通のスーパーで、ちょっと高いワイン
買うとか、映画のDVD3本くらい一晩で全部見ちゃうとか。そういうのでね、十分
だったんだ……ごめんね」

鈴の音がする。

○電車内・現在

若い男「だから、絶対行くから。もう本当、ごめん！」

若い男の声で、楓は我に返り、思い出に浸ってしまっていたことに苦笑する。

若い男「あの！夜、良いとご予約したから、期待してて。うん、後で。はい。(電話を切る)

すいませんでした」

若い男、周囲の乗客に頭を下げると、再び座席に座る。

電車内に静寂が戻る。

皆何となく気を使い、音を出すのをためらうようにじっとしている。が、そのう

ち、あまりにも電車内が静かすぎることに気づき始める。

若い女「寒っ」

乗客「えっ、空調止まってる……？」

その言葉で、電車内はざわざわとし始める。

皆寒さを実感し、コートをなおしたり、カバンからカイロや手袋を取り出したり、

体を小さく動かしたりして暖を取るうとする。

寒くなってきた楓も、自分の荷物の中に何か入っていないかと探し始める。カバ

ンの中から包装されたプレゼントが出てくる。

楓 「えっ？」

鈴の音がする。楓の意識は大学時代のクリスマスイブへ。

○楓の下宿している部屋・大学時代のクリスマスイブ

20歳くらいの楓が、友人二人と下宿先でクリスマスパーティーという名の飲

み会をしている。床にはビールやチューハイの缶。袋を開けただけのお菓子など。

プレゼント交換の後で、それぞれが自分のもらったプレゼントを手にしている。

友人1「(楓のプレゼントを指して) それ、あたしからだよ！」

友人2「(変なぬいぐるみを持ち) じゃあ、これ楓？」

楓 「うん、私」

友人2「何これ？」

楓 「ハシビロコウ」

友人2「……やっぱ独特だね、楓のセンス」

楓 「かわいくない？」

友人2「ハシビロコウはかわいくないよ」

楓 「なんで。かわいいよ、ハシビロコウ」

友人1「(楓に) ねえ、あたしの早く開けてよ！」

友人2「てかき、3人でプレゼント交換っていまいち盛り上がんないね」

楓 「しょうがないじゃん。暇なのこの3人だったんだから」

友人2 「いつもの3人ね」

友人1 「全然クリスマスっぽくならないよね」

楓、プレゼントを開ける。出てきたのは、温泉の元の入浴剤。

楓 「(友人1に) てかこれも全然クリスマスっぽくなくない?」

友人1 「一応クリスマスっぽいプレゼントとか考えようとしたんだけど……キラキラした

店の雰囲気に入る事すらできなかったぜ」

楓 「ああ、わかる。クリスマスって基本恋人いる人のイベントだから」

友人2 「(友人1に) 別れたばっかだときついよね」

友人1 「おい」

友人2 『今年と一緒に過ごせなくてごめん』とか言ってたのにね」

友人1 「おい、えぐってくんな」

楓 「はい、かんぱーい」

楓と友人2、友人1にむけて乾杯する。

友人2 「……いつまでこうしてんだろうね、わたし達」

友人1 「でも案外あとちょっとかもよ。就職とかしたら流石に変わるだろうし」

楓 「確かに」

友人1 「えー、寂しいー」

楓 「じゃあもう、3人で住んじゃう?」

友人2 「あー、めっちゃいいかも。料理とか掃除とか誰かやってくれそうだし」

楓 「全員同じこと考えて誰もやらないっていう」

友人2 「ありうる」

友人1 「でもさ、結婚とかして一人ずつ減っていくの、悲しくない?」

友人2 「私は結婚一生できる気しないけど」

友人1 「子供とかは?」

友人2 「子供は、まあ、欲しいけど」

楓 「じゃあ、どっかから引き取ってきて3人で育てる?」

少しの間。

友人2 「……それは流石に」

友人1 「流石にないかな」

楓 「だよね」

友人2 「まあ就職しても変わらず3人で飲みましょう」

友人1 「ま、そだね」

楓 「うん」

三人 「乾杯!」

友人2 「じゃあ私、そろそろ帰るわ。」

部屋の中には、楓しかない。楓も、今の楓の姿になっている。

楓 「……一生変わらざいいたらいいのに」

○電車内・現在

電車内で楓は、使い捨てのカイロを握っている。寒そうに頬にあてたりして暖を取る。

またしばしの静寂。

楓の隣に座っていた若い女が、激しくせき込み始める。近くの人たちは、少し迷惑そうな顔をする。

若い女「すみません……」

ひとしきり咳をして、また電車内は静かになる。が若い女の体調は悪そうで、震えている。

楓 「あの、これ。(カイロを差し出す)」

若い女「えっ？」

楓 「使ってください」

若い女「大丈夫です、本当。すみません」

楓 「あの、本当に。寒いので」

若い女「でも……」

楓 「私、大丈夫なので。使ってください」

若い女「……すみません」

若い女、カイロを受け取る。言葉とは裏腹に寒かったのだろう、大事そうにカイロを握る。

また激しくせき込む。

楓、とっさに若い女の背中をさする。

若い女「すみません」

楓 「大丈夫ですか？」

若い女「ちょっと風邪っぽくて」

楓 「寒いですよ。暖房戻らないし……」

若い女「……一日中バイトで外にいて。そのせいだと思うんです」

楓 「本当にお疲れ様」

若い女「みんな予定あるからってシフト入ってくれなくて、一日中入らなくちゃいけなくなつて……サンタの格好して。バカみたいなミニスカのやつ。それで一日中外で立ちっぱなしで……自分が一番クリスマスに損してるのに、なんでクリスマスに遊んでる奴らの代わりに働かなきゃいけないんだろうって。なんかもう本当イライラして……」

楓 「そっか」

若い女 「(我に返り) ……すいません」

楓 「ううん」

楓は若い女の背中をさすり続ける。

楓 「小さい頃、クリスマスの街、大好きだった。今もう、どうでもよくなっちゃったけど。全然自分には関係ないイベントだなんて」

若い女 「……」

楓 「近所に、本気で電飾かざる家があつて。毎年それ楽しみで。駅前とかも綺麗に飾り付けられてて、町全体がちよっと浮かれてて。寒いと空気が澄んでて、それで余計に綺麗に見える気がして。子供だから、寒いのも気にならなかったし」

若い女 「はい」

楓 「でも一番好きだったのは、デパートとか商店街とか、いろんな所にサンタの恰好した人がいるのが好きでした。あつ、わかってるんですよ、普通にお店の人がそういう格好してるだけだって。普通の人たちが、サンタになる日っていうのが、すごく特別な気がして。嬉しかったんです、街中にサンタが溢れてるの」

若い女 「……はい」

楓 「ごめんさい、なんか。だから……だから、ありがとうって。伝えたくて。きつとあなたのおかげで、嬉しかった子がいるから。だから、ありがとう」

若い女 「……すいません。ありがとうございます」

その時、電車内の照明が落ち、あたりが暗くなる。

若い女 「ちよっ、何？」

乗客 「停電？」

若い男 「ふざけんよ……」

真つ暗な中、電車内はざわざわとするが、段々とその音が無くなっていく。
小さな明かりが見える。

○楓の部屋・幼少期のクリスマスイブ

子供の頃の楓の部屋。子供の楓は薄暗い部屋の中で寝ない駄々をこね、両親に説得されている。

子供の楓 「まだ寝たくない」

母 「ちゃんと寝ないと、サンタさん来ないわよ」

子供の楓 「嫌だ、サンタさん待ってる」

母 「こら」

父 「良い子にしてないと、サンタさん来ないぞ」

子供の楓 「いい子にしたもん。学校も休まなかったし、お手伝いもしたし」

父 「夜更かししていると、悪い子って思われちゃうかもよ。せっかくサンタさん来ても、こんな時間まで起きてる子にはプレゼントあげられないって帰っちゃうかもよ。いいの？」

子供の楓「……嫌だ」

父 「じゃあ、早く寝よう」

子供の楓「サンタさんに、ありがとうって言いたかったの。楓のところまで来てくれてありがとうって」

父 「それはパパとママが言っておくから」

子供の楓「パパとママは起きててもいいの？」

父 「大人はサンタさん来ないから。サンタさんは、楓のためだけに来るの」

母 「楓は、サンタさんに何お願いしたの？」

子供の楓「楓は……」

大人の楓が、遠くから見ている。子供の楓と両親が話す声は、聞こえなくなっている。

楓 私……何お願いしたんだろう？ 何をお願いしたのか思い出せないな……何お願いしたんだろう？ 今なら……何をお願いするんだろう。

明かりがつく。

○電車内・現在

電車内が明るくなる。続いて、暖房が再開する音。

電車内に安堵した空気が流れる。

若い女「……大丈夫ですか？」

楓 「えっ？」

楓、泣いている。自分でも気づいておらず、慌てる。

楓 「ごめんなさい！ あれ、なんで……」

若い女、楓の手をそっと握る。

楓 「(慌てて) ごめんなさい。本当に全然なんでもなくて……」

若い女「怖かったですよね、停電。私も暗いのダメで。本当びっくりしちゃって。落ち着くまで、こうしてていいですか？」

楓 「……はい」

電車がゆっくりと動き出す。

○駅のホーム

楓たちの乗っていた電車がホームにつく。乗客たちが次々降りていく。楓と若い女も電車を降りる。若い女は楓に頭を下げ、去っていく。楓は改札に向かわず、ホームに立っている。

アナウンス「お客様にお知らせいたします。この電車は線路上積雪の影響で、現在全線で運転を見合わせております。お急ぎのところ大変申し訳ありませんが、運転再開まで今しばらくおまちください」

楓 「さて、どうしよっかな……まだ降りる駅じゃないんだけど……」

楓、スマホを取り出して、歩いて帰るルートを調べる。

楓 「10キロ……2時間半くらいか。いつか、歩くか。どうせ暇だし」
少しだけ明るい顔をして楓は歩き出し、改札へと向かう。

終わり